



“ 2～3週間に1度草を刈れば、
自然な農法に近づけると分かったよ ”



「グラン・クリュのぶどうを
除草剤なしで育てる相棒だ」

次の目的地はボルドー。この世界的なワインの生産地は、思いのほか海に近く、ぶどう栽培に適した白い石灰質の地質が印象的です。今回はボルドー市街地から35kmほど内陸部にあるサン・テミリオンへ。素朴でこじんまりとした歴史的なまち並みが残り、中世の巡礼者たちから「あのまちのワインはうまい!」と評判になった場所です。

さて、ラビットモアーに乗り、にこにこ顔

で登場したのは農園主のデュボアさん。「ようこそ、Chateau Saint Georgeのグラン・クリュ（特級畑）へ!」と陽気に迎えてくれました。除草剤を使うことなく、ほぼひとりで5haのぶどう畑の世話をしています。

「欧州連合（EU）が定めた残留農薬の基準はとても厳しいし、人々のオーガニック志向も強いから、うちの畑は無農薬だよ。畑での作業は増えるけれど、その分、ラビットモアーがよく働いてくれる。草刈りはもちろん、傾斜がきつい農園内の移動も簡単になった。草刈りをしながら、同時にぶどうのカビを防ぐ液剤も撒くから一

石二鳥だね。草が伸びる夏になると毎日だろ? だから、メンテナンスにも心を配っている」。そう言ってデュボアさんは工具が並ぶ小屋へ案内してくれました。

海外に暮らすORECユーザーの中には、それぞれ独自のチューンナップをしている人がいます。日除けパラソルをくり付けたり、草刈りと同時に液肥や農薬を撒こうとタンクを搭載したり。もちろん改造はいただけませんが、「草刈機をさらに使い勝手よくしよう、農作業をらくにしよう」という工夫を感じ取れ、ORECの“ものづくりの原点”との共通点を見い出せました。

「減農薬の法律ができるから、
ますます草刈機が必要になるね」

ぶどうの栽培はフランスの豊かな食文化を担うと同時に、ビジネスであり、経済です。ぶどうが確実に育ち、ワインへと姿を変えることも重要なのです。

そのためEUでは、2009年、農薬をただ禁じるのではなく、地球環境と共存できるような使用量に厳しいルールを作りました。現在、各地の減農薬の状況は集約され検討材料となり、2018年末、新たに農業に関する適切な立法提案を行うことが決定。

今後はさらに、草と共存する草生栽培など有機無農薬農法の増加が見込まれています。「今より草刈機に助けってもらわないとね」。そんな声が聞こえてきます。

「畑に植えたバラの花は
ぶどうを見守る存在なんだよ」

Chateau La Gaffeliereのグラン・クリュを取り仕切るブレアさんによると、EU全体で薬剤使用量は大幅に減少しているそう。「この畑も10年間、完全無農薬栽培をしているよ。除草剤も全く使用していないけ

れど、ORECのラビットモアーで2～3週間に1度、草刈りすれば夏も乗り切れるね」。

そんな話を聞きながら目にしたのは、ぶどう畑に咲くバラの花。なぜこんなところに? とブレアさんに聞けば「バラはぶどうより繊細な植物。虫がついたり、病気にかかったりするのは、バラの方がぶどうより先なんだよね。だから、バラの様子はぶどうが無事に育っているかどうかの自然なサインになるんだ」。ボルドーの無農薬栽培を見守るバラのように。ORECの草刈機もまた、安全・安心なこれからの農業をサポートしていきます。



1. ぶどうより先に病害虫の影響を受けるバラ。無農薬栽培の畑では“病害虫センサー”として植えられている。2. 色づくのを待つ、青いぶどう。3. 有名シャトー Chateau Margauxはメドック地区にある。4. ボルドーでは若者の就農者も多い。5. サン・テミリオンの丘。6. 作業小屋にいるデュボアさん。7. 市場にはオーガニック野菜が並ぶ。8. ボルドー市街地の様子。

G.O. #001 GLOBAL OREC SPECIAL ISSUE



Bordeaux
Story From People In France

サン・テミリオンの丘を中心に数々のシャトーが点在する。白い石灰質の大地がボルドーらしさ。